

2024 年度 東京経済大学大学院博士論文審査報告書

2025 年 1 月 22 日

コミュニケーション学研究科委員長殿

論文審査委員

主査 小林 誠

副査 松永 智子

副査 本橋 哲也

審査の結果、下記のとおり報告します。

記

審査請求者	コミュニケーション学研究科	
	学籍番号	20DC002
	フリガナ 氏 名	ハマノ トシコ 濱野 敏子

評価欄	審査委員署名（自署）	評価
	小林 誠	合格
	松永 智子	
	本橋 哲也	

＊評価欄には合格または不合格と記入してください。

論文題名
異質な他者とともに生きる：在日カンボジア人の生き方から学ぶ

(NO. 1)

(所見欄)

本論文の目的は、インタビュー調査を通して得られた在日カンボジア人のライフストーリーを、人類学者ティム・インゴルドの議論を用いて考察し、そこで得られた知見から別の生き方の可能性を探ることにある。本論文の構成は以下の通りである。なお、第3章、第4章、第5章は『コミュニケーション科学』にそれぞれ掲載された論文を基にしている。

序章：問題関心、目的、方法

第1章 本稿の解釈のための道標

第2章 在日カンボジア人とは

第3章 希望を生きる在日カンボジア人1.5 世

第4章 経験の継承を生きる在日カンボジア人1.5 世

第5章 モノとともに生きる在日カンボジア人

終章

序章では、本論の目的や問題関心、方法論が示される。本論の目的は、主に難民として来日したカンボジア人が日本社会においてどのように生きてきたのかを描き、考察することであり、その問題関心の背景として著者がかつてカンボジア難民のキャンプで支援活動に従事していた時に感じた矛盾や、その後の日本におけるカンボジア難民の受け入れに関する消極的な姿勢があることが説明される。そして、在日カンボジア人が直面する困難を視野に入れつつも、彼らが「異質な他者」とともにどのように生きてきたのかを「応答プロセス」という概念で考察していくとされる。また、調査方法はインタビューで、対話的構築主義に基づくライフストーリー研究であるとする。

第1章では、著者が「道標」と呼ぶ本論の考察で最も重要な概念である「応答プロセス」について、インゴルドの「生きていること」、「線」、「応答」、「絡み合い」、「メッシュワーク」などといったキーワードとともに論じる。著者のまとめによると、私たちの生は線のように自由に流れ、運動し、他者の生の線と絡み合っすすむ。これが「応答 (correspondence)」であるという。そして、こうした多様な線の絡み合いによって構成されるのが「メッシュワーク」である。こうしたインゴルドの議論を受けて著者は「応答プロセス」という概念を導き出し、それを「環境（社会と自然の融合）の中で、異質な他者（人間と人間以外を含むすべての存在）と出会い、絡み合い、ともに出来事を経験し、メッシュワークを形成し、新しい地平を開いていく生き方」と定義する。

第2章では、在日カンボジア人の概要が説明される。1960年代から70年代には留学などで数十人程度が日本に居住していたが、1980年代以降、合計1357人のカンボジア人がインドシナ難民として日本政府によって受け入れられてきた。日本が受け入れたインドシナ難民の多くがベトナム人であり、カンボジア人は12%に過ぎない。また、ボートピープルを4割程度含むベトナム人難民に比べて、カンボジア人難民はタイの難民キャンプを経て空路で日本に辿り着いたという特徴を持つ。日本政府は難民定住センターを設置するなどインドシナ難民の支援に取り組むものの、彼らは日本語習得や就労、住宅の確保、教育などに多くの問題を抱えていたことが指摘されてきた。また、1990年代後半からはカンボジア難民についての調査研究が進められ、日本社会への適応に問題を抱えていることなどが示されるが、そうした研究では主に彼らを難民としての側面のみをとらえるものであったという。それに対して著者は、来日から40年を経て、世代交代も進みつつある現在において、ライフストーリー的な研究で彼らがどのように生きてきたのかを明らかにしていく。

続く、第3章から第5章までは本論の核となるライフストーリーが具体的に検討される。

まず、第3章では人類学者の宮崎広和の「方法としての希望」をめぐる議論を参照しながら移民1.5世の女性Pさんの語りが検討される。Pさんは1980年生まれで、5歳の時からタイの難民キャンプで過ごし、1994年に来日した。異文化の日本で生きる不確実な状況におけるPさんの生き方を〈もう-ない〉から〈まだ-ない〉という「知の方向転換」として分析しつつも、就職面接を拒否されることからカンボジア名ではなく日本名を名乗るといった様々な差別を背景にした「戦略的な立ち回り」と、店頭での販売員としてカンボジア名を名乗るといった「ありのままの自分」でいることの使い分けがなされていることが指摘される。こうした点を含みつつも、日本社会で生きていく上で重要になっていたのは「異質な他者」であった。それは間違っかけてしまった電話の相手であったり、通っていた夜間高校のクラスメートや教員であったり、店員として接した客であったりするという。そして、「異質な他者」である職場の同僚の一人はやがて夫となり、夫の家族や親族とも良好な関係を築いていく。他方で、自分の親や親族は大学の進学を反対するなど、身近で親密な人が「自分の人生のいく道を阻止する他者となる」と指摘する。こうして他者は関係性に基づくものであり、変化するものであると論じられる。いずれにせよ、この「異質な他者」との親密で開放的なメッシュワークこそが「応答プロセス」の実践であるとされる。

続く第4章では「経験の継承」がテーマであるという。具体的には、1981年に難民キャンプに生まれ、8歳の時に来日した女性Nさん、1982年にカンボジアに生まれ、13歳の時に来日した女性Mさんのライフストーリーが検討される。Nさんは日本語の問題などにより小学校で孤独感を味わい、カンボジア人としての自己を否定するようになってしまったが、いじめに対抗したり、年上のカンボジア人少女の優しさに触れたり、ロールモデルとなるべき人と出会ったり、専門学校の教員に優しい言葉をかけられたりすることで、自己が変容し、自分の難民としての経験を肯定的に捉えなおしていく。Mさんは日本語支援のボランティアの人たちと交流し、また、知り合いの先生に勉強を教えてもらい、さらにはそこでNさんと出会うことでカンボジア人としての誇りを感じていく。市役所の就職面接の際に差別を感じて悔

しい思いもしたが、現在は民間の会社に就職し、夫と4人の子供と一緒に暮らしている。NさんもMさんも子供たちに対して難民としての経験やカンボジアの文化などについて伝えていこうとしており、著者はこうした他者との絡み合いという「応答プロセス」の中で経験を継承しようとする願いが生まれたと論じる。

そして第5章では、過去の記憶を媒介するモノに注目する。こちらは具体的には、1952年生まれで1972年に留学のために来日した男性Sさんの絵画、1971年生まれで14歳の時に難民キャンプを経由して来日したMSさんの銀塊や石にまつわる語りが検討される。Sさんは2歳の時に母方の叔母の養子となった。叔母夫妻の商いがうまくいっていなかったためSさんも幼い頃から家の商売の手伝いなどをすることで、「自立的」な人間に育っていったという。ただ、実母との関係が疎遠であったことが心に残っていた。実母の写真は一枚もなく、1972年に来日する時にも見送りに来てくれなかった。他方で、1975年にポルポト政権の樹立によって帰国が難しくなり、家族との連絡も途絶えてしまったことで、不安と無力感を募らせる。そんな中、日本人女性と結婚し、妻となる女性が日本人ジャーナリストとともにカンボジアを訪問する。Sさんの妻は国全体が荒廃し、人々が苦しい生活をしていることにショックを受けた。美大を卒業したての画家であったSさんの妻は、帰国後に伝統的なスカーフを頭にまもって路上の市場で野菜を売る若い女性の姿を描く。Sさんはこの絵に強く惹かれるが、事情によってそれを手放さざるをえなくなる。後に妻にその絵画の「レプリカ」を描いてもらう。Sさんはこの「レプリカ」の絵画と「対話」をして母のことを想像することが示される。もう一人のMSさんは、9歳の時、内戦を逃れるために、家族とともにタイの難民キャンプを目指して歩いていった。その際に重要だったのが銀塊であり、難民キャンプでバケットと交換したのを「命の交換」と呼ぶ。難民キャンプで、MSさんの母は岩を掘り起こして石臼をつくってもらい、それを使って伝統的な料理を家族に食べさせることができたという。この石臼は日本にも持参したというが、無くしてしまったため、日本で拾った石で代用しているという。こうした人とモノとの絡み合いが「応答プロセス」として考察される。

終章では、これまでの議論を再び「応答プロセス」として再検討されていく。「応答プロセス」が「促進」される場合と反対に「阻害」される場合が具体的に検討される。「応答プロセス」が「促進」されるのは「絡み合い」の関係にあり、メッシュワークの中にある時であるという。他方で、他者が「対象化」される時、「応答プロセス」は「阻害」されるが、メッシュワークによって再び「応答プロセス」が働くという。また、在日カンボジア人の「応答プロセス」の特徴は「お互いの特質（差異）を保持したまま新たな個（新たな差異）を生成変化する「絡み合い」という関係と、その関係が自律的に展開して別の生と絡み合う関係の網『メッシュワーク』である」と指摘する。最後に、私たち日本人が学ぶべきもう一つの生き方として、異質であることに価値を見出すこと、他者と絡み合いの関係を築くこと、絡み合いの歴史であるルーツを大切にすることの3点を指摘する。

本論はライフストーリー的な研究として、インタビューによって在日カンボジア人の人たちの語りを紡ぎ出し、筆者が説明を加えながら配列し直すことで、彼らがたどってきた経緯を詳細に描き出したことは、意義深いこととして大いに評価すべきだろう。筆者は「マジョリティ中心主義から脱して、移住者の視点で日本の社会を見ていくための一つ方法が、本論が採用した移住者の語りを聞くことである。語りを聞くこととは、語り手の言葉とその生活世界をありのままに受け止めることである（p.49）」と指摘しているが、著者の研究はまさにそれを実践するものである。また、著者も指摘するように、インドシナ難民の研究はベトナム人を対象としたものが多く、在日カンボジア人の研究は少ない。さらに、そうした在日カンボジア人の研究は比較的、移住して日が浅い時点での調査に基づくものであり、難民として来日してから40年ほど経た現在、より長期的なスパンにわたる経験をめぐる語りの記録は貴重な資料としての価値がある。

もう一つの本論の意義として、難民に対するライフストーリー的な研究にインゴルドの議論を導入した点を指摘しうるだろう。さらに、インゴルドの議論を踏まえた上でつくられた「応答プロセス」という独自の概念を提示し、それを基に考察することで、彼らの語りを提示するだけにとどまらない議論を展開することを可能にしたといえる。ただし、この点に関しては必ずしも筆者の見込み通りに成功しているとはいえない。その理由は、「応答プロセス」の定義である「環境（社会と自然の融合）の中で、異質な他者（人間と人間以外を含むすべての存在）と出会い、絡み合い、ともに出来事を経験し、メッシュワークを形成し、新しい地平を開いていく生き方」は、著者によるインゴルドの「生きていること」の説明である「まず動き続ける運動であり、環境の中で他者と出会い、応答し、出来事が生成し、世界に開かれていくプロセスである」と類似しており、新たな概念を提示することによってどのような見方が可能になったのかが説明されていないことにもある。また、ライフストーリーをめぐる諸議論や移民・難民研究が考察のところで検討されておらず、インゴルドの議論や「応答プロセス」の導入によって、どのように既存の議論への貢献となったのかが明確ではない。この点に関して、口述諮問においては3章から5章という本論の核となる各章において、ドゥルーズ、ベンヤミン、ラトゥールの議論をインゴルドの議論と関連させながら考察することもできたのではないかという指摘もなされた。

本論の論述は必ずしも明快ではない点も指摘せざるをえない。その理由の一つは「応答プロセス」、「他者」、「異質な他者」、「メッシュワーク」、「希望」などの本論において重要なキーワードを中心に通常の用法とは大きく異なる定義づけがなされ、あるいは定義が曖昧で論文の中で変化し、また、必ずしも使い分けが適切になされているわけではない点にも求められる。他にも、本論の事例においては主に日本人という「異質な他者」との「絡み合い」が説明される一方で、対象としたカンボジア人の家族や親族に関する記述が少なく、時にネガティブな形でのみとりあげられていたことに関して、調査の仕方とも関連させながら慎重に議論すべきだった。また、日本社会については時に単純化して記述されていた点も指摘できよう。

こうした問題点はあるが、本論が博士論文として十分に高い水準に達していることは疑いない。とりわけ、インタビュー調査を基に在日カンボジア人がどのように生きてきたのかを詳細に描いたことの意義は、ここで再度、強調しておきたい。また、口述審査における質疑応答においても、著者の在日カンボジア人の人々に対する深い共感と研究に対する熱意と真摯さが伺えたことを付言しておく。

以上のように、論文審査および口述諮問の内容を踏まえて主査・副査の計3名で合議し、総合的に検討した結果、本博士論文によって濱野敏子さんに博士（コミュニケーション学）の学位を授与することが適当であると判断した。